

2. 震災被害と文化財の今

①【美術・工芸・典籍など】

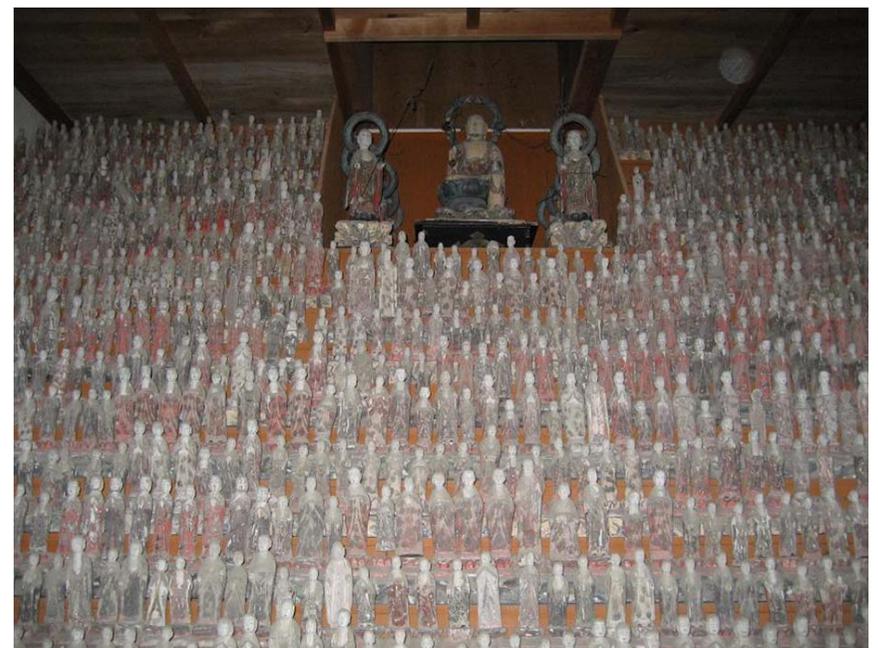
震災に伴う津波の被害が特に大きかった閑上・下増田地区には、指定や登録文化財になっているものや、そうでないものも含め、多種・多様な文化財がありましたが、残念ながら失われてしまったり、もとの状態に戻せない程こわれてしまったりしたものもあります。一方、幸いにも震災の難をのがれ、現在も以前と変わらぬ姿をとどめている文化財もあります。ここでは、閑上・下増田地区のものを中心に、そうした文化財のかつての姿や現状について、簡単にご紹介いたします。

○北釜 観音寺 地蔵堂の千体仏

下増田の北釜に所在する光明山観音寺の参道脇にあった地蔵堂には、千体仏が伝わっていました。地蔵堂の上段中央に1体の地蔵菩薩（極楽浄土の阿弥陀如来をあらわす）と、その左右にそれぞれ5体の地蔵菩薩（十王思想における十王を表す）を配し、十数段あるひな壇に一体ごと表情や姿の異なる大小数百の地蔵菩薩立像（極楽浄土の阿羅漢の姿＝仏の弟子となり悟りを得たもので、現世の我々の姿を描写した姿）が安置されていました。この千体仏のように、江戸時代の整然と並んだ姿を今に残す事例は県内でも数少ないものであり、大変貴重なものとして名取100選にも選ばれていましたが、残念ながら津波により、地蔵堂ごと流されて失われてしまいました。



千体仏が祀られていた
北釜観音寺の地蔵堂



千体仏のようす

○絵馬

絵馬は、神に生きた馬を献上できない人々が板に馬の絵を描いて奉納したのが始まりといわれています。その後人々の信仰形態の変化に伴い、馬以外のさまざまな絵馬も奉納されるようになりました。

震災前に行われた調査では、寺社・仏堂など 28 ヶ所で 246 枚の絵馬が確認されています。閑上・下増田地区にも多くの絵馬が残されており（下の表）、子安延命地蔵菩薩が祀られている牛野地蔵堂には、79 枚もの絵馬が奉納されています。

閑上・持法院には、船乗りが海の神様に奉納した宝剣が貼られた絵馬が残っていましたが、津波により建物ごと失われてしまいました。これらの絵馬は、地域における民間信仰の風習を現在に伝える貴重なものであり、失われてしまったのは残念なことです。



牛野地蔵堂 奉納されていた絵馬



持法院に奉納されていた宝剣形絵馬

○石造物

津波被害の激しかった地区にあった石造物の大半は、旧形・原位置をとどめるものは少なく、流失・倒壊・破損し、残ったものは神社・寺ごとに集積されている状態です。

今回の調査は、震災前に所在調査がされている絵馬、^{いたひ}板碑などは調査票をもとに現地で確認しました。建築物や石造物など指定を受けていない有形文化財の調査は震災前には実施されていないので、^{ぶんけん}残された文献などの記録をもとに、その存在が推定できるものを選んで、現在の状況や所在の有無を確認しました。

現地では起立するものはなく、倒壊・流失し、碑面を裏に向けたものが大半で、破損により断片となり種別の特定ができないものが多く存在します。

また、集積の段階で混在したものも含まれ、必ずしも原位置に戻されているかどうかの確認までできないため、集積された個所での表記としています。

今後、^{きめい}記銘、^{ひぶん}碑文部分を確認するため^{たくほん}拓本・^{じっそく}実測図の作成などを進め、これをもとに原位置検証や、保存方法について考える必要があります。



石造の延命地蔵



金銅製の延命地蔵

被災地での現地調査(津波による浸水区域・東部道路東側)

○は確認できたもの △は断片となり確定できないもの ×は確認できなかったもの

場所	名称	記銘	備考	現地調査	備考		
1	閑上・猿猴	震嘯記念碑	昭和 8年	○	碑自体の損傷はないが、北側に傾いている		
2	古明神塚	板碑 その他	不詳	△	土留石として使用されているものもあり、全体の再調査が必要		
		念仏供養碑	昭和 8年	△			
		六字名号碑	明暦 元年	△			
				集積された石造品あり		△	
3	小塚原	大笠念仏 南無阿弥陀仏	明治 35年	8月20日	△		
4	閑上小学校内 及び周辺	遠藤莊兵衛 遠藤卯右衛門	大正 11年		×	津波により倒壊、未確認	
		頌徳碑			×		
		二宮先生銅像	昭和 12年		○		
		耕地整理記念碑	昭和 11年		○		敷地内、正門北に所在
5	小塚原・熊野神社	絵馬			○	現存	
		庚申供養碑			○	倒壊 原位置にあり	
		山神			○	破損、H25再建	
	寺田地区	仏塔 供養石塔		観音堂あり(三浦太氏管理・同氏宅内に一石一字)	○	一石一字が露出する	
		観音堂		観音ほか1体	○	一部欠損する(個人管理)	
	小塚原・寺田	名号	安永 6年		○		
		馬歴神	明治 20年		○	欠損 倒壊	
地蔵				○			
	庚申供養碑		その他石造物あり	○	欠損 倒壊		
6	東禅寺	後藤富蔵遺徳碑			△	敷地内に石造物は散在するが、刻面の確認できないものも多く、断片のものもあり現況での詳細確認は不可能である。石材を引き起こしながらの確認が必要。	
		洞口黙三郎碑	安政 5年		△		
		伊藤伊三郎(9代)			△		
		伊藤伊三郎(6代)	寛政 10年		△		
		海難靈魂塔	寛政 5年		△		
		青銅地蔵	文政 7年		○		
		維石銘			△		
		供養碑	宝暦 14年	奉読金剛般若経一万巻(一字一石経が埋納)	△		
		阿弥陀如来 半陽刻	元禄 10年		○		
		石碑	天和 2年	本来無一物	△		
		烏八臼碑		墓碑上部に刻 玉田家墓地	△		
庚申碑		集積された石造品あり	○				
7	閑上公民館敷地付近	石造品		東禅寺に及ぶ範囲が津波の碑の比定地	×		
8	閑上中学校北	山神碑			○	閑上派出所西	
		馬頭観音			○		倒壊 碑部分は現存
		地蔵 半陽刻			○		
		庚申塔			○		倒壊 半壊
9	持法院			絵馬	×	敷地内に、石造物等確認できなかった。	
		石造阿弥陀如来坐像			×		
		念仏供養碑	元禄 8年		×		
		六地蔵	延宝 3年		×		
		石地蔵	延宝 4年		×		
	石地蔵	寛文 4年		×			
10	観音寺	板碑(上部破損)	延元 3年		△	境内地内に石造物が集積するが、欠損し断片のもの、記銘部分が下向きのもが多く、今後引き起こしながらの詳細調査が必要。	
		六地蔵石幡	昭和 2年		△		
		供養碑	文化 2年		△		
		供養塔	安永 7年		△		
		名号	安永 7年		△		
		名号碑	元禄 8年		△		
		阿弥陀如来 半陽刻			△		
		地蔵 半陽刻	享保 13年		○		
		如意輪観音像			○		
		光明真言供養碑			△		
	仏像ほか		集積された石造品あり				

被災地での現地調査(津波による浸水区域・東部道路東側)

○は確認できたもの △は断片となり確定できないもの ×は確認できなかったもの

	場 所	名 称	記 銘	備 考	現地調査	備 考
11	湊神社	小齊伝臈	明治 43年		△	境内地内にまだ多くの石造物が点在しているが、欠損し断片のものも多く、また記銘部分が下向きのももあり、今後引き起こしながらの詳細調査が必要。
		青面金剛像刻碑(庚申結構碑)	元禄 14年		○	
		湯殿山	文政 3年		○	
		山神	文化 14年		○	
		庚申	天保 10年		○	
		狛犬			○	
		象頭山	文政 8年		○	
		鳥居			○	
		手水鉢	宝暦 14年		○	
		金毘羅山			○	
		馬歴神			○	
		供養碑ほか		集積された石造品あり	△	
		灯籠	天保 14年		○	竿のみ残る
12	天正院	仏像 石製品ほか	不詳		△	石造物のみ、断片が残る
13	開運橋	旧登録文化財		周辺に残欠あり 記名遺物の確認	×	袖石ほか断片が残る
14	地蔵堂旧宮下橋 橋詰所在	石造地蔵			○	
		金銅製地蔵			○	右手、後背欠損
		供養塔ほか		集積された石造品あり	○	原位置不詳
15	日和山下	英霊碑ほか	昭和 10年		○	倒壊、他の碑とともに集積 小規模な欠損、ひび割れあり
		震嘯記念碑	昭和 8年		○	
		山神		集積された石造品あり	○	
16	牛野・地蔵堂	絵馬			○	
17	毘沙門堂	絵馬 板碑			○	
18	下増田神社	芭蕉句碑			○	
		庚申碑	安政 12年		○	
		金毘羅大権現	文政 10年		○	
		湯殿山供養	文政 9年		○	
		大権現	嘉永 5年		○	
		手水鉢(記銘)			○	
庚申碑	寛政 11年	大正15年の庚申碑あり	○			
19	下増田・観音寺	絵馬 千体仏			×	流失 千体仏の存否について調査中
20	北釜・十二神神社	石造物			×	流失
21	総明寺 (東場墓地)	供養塔	承応 3年		×	流失
		名号碑(阿弥陀如来)	貞享 2年		×	
22	小塚原・下田	念仏供養塔	元禄 10年	小林宅から北へ500mの農道	△	

○湊神社文書

湊神社 千葉 規氏より寄贈を受けたもので、明治以降の祭礼、寄進などの明細記録が主体となりますが、神仏分離以前は、本山派修験の別当である東光院の末院としての機能を合わせ持ったものであることを示す文書も残されています。東光院は安永頃(1770 頃)本山派の大先達として、末寺が 120 院を数える大勢力でした。当時の記録を見ると「閑上濱 大光院」があったことが記されています。

明治に入り、神仏分離・廃仏毀釈は修験にも及び、従来仏教色が強かった院は廃され、神社の別当を務めていた修験は神官として生き残りしました。

湊神社も神社としての前身を受け継ぎ、閑上濱の東進化に合わせ場所を移し、現在の神社として整備されました。本尊仏の十一面観音は観音寺に、修験部分は天正院と、現在のように独立した形となっています。(神仏分

離：明治維新後行われたもの。神仏分離・廃仏毀釈とは、神仏習合を廃止し、神社から仏教的要素を排除するために行われたもの。極端な場合には仏殿の撤去、仏像、石仏などの打ち壊しまで行われた例もあります)

資料は整理中ですが、その一部を紹介したいと思います。



《湊四社大明神明細》

「湊神社」としては明治初期に成立したものです。それまでの流れを紹介しま
すと、奈良時代、名取川河口に水門を守るために不動明王などが「ゆりあげ水門
明神、五大明王神堂」として祀られたのが同神社の前身であると伝えられてい
ます。室町時代の応永年間（1394～1427）には、奈良の春日大社の四柱を勧請
し、湊明神社又は水門四社明神と称されています。

はじめは閑上字大塚付近（明神堂）にあり、こんりゅう 建立時期は不明ですが、天台宗
本山派「大光院」が別当寺として置かれていました。

「大光院」も閑上小学校近くに仏文寺という字名が残っていることから、この
付近に位置していたのではないかと考えられています。

その後、名取川の改修とこれに伴う閑上地区の整備による東進化により、明暦
頃（1655～6）現在の地に移されたと伝えられています。

「ゆりあげ水門五大明王神」を祀る堂が「明王神堂」で、略して「明神堂」「お

明神様」と言われていました。伝承によると「ゆりあげ水門神社」が町頭から現
在の地に移され「名取川水門神社」と言われたのは明暦頃と伝えられます。

「大光院」と同じ東光院の末院である広積院記録（『永禄以来当院記録』）によ
れば、「元文四年（1739）十月一日 閑上濱明神宝殿造営遷宮」「宝暦四年（1755）
9月15日閑上明神はいでん拝殿出来」との記載があり、閑上濱明神、閑上明神と呼ばれ
ていたことが分かります。また宝殿の造営、遷宮をしたこと、新たに拝殿ができた
ことなどの記述もあり、この時期が移設の時期なのかあるいは再建であるのか、
現時点では明らかではありません。

紹介資料は神社明細の一部で年代は不明ですが、内容から明治期初頭のもの
と思われます。祭神四柱の一角が春日神社と異なることなどから、明治期の神仏分
離による再編成によるものと考えられます。

名取郡閉上備物惣鎮守

正位名取川湊四社大明神

鎮座

東向

祭神

稚産靈神

武甕槌命

徑津主命

天兒屋根命

本地佛

十面觀世音

一 本社

一 拜殿

一 幣殿

一 石鳥居

一 境内

御珍地

一 祭禮

正月十九日

凡月十八日、廿日迄

本社

風雲王宮

富主姬社

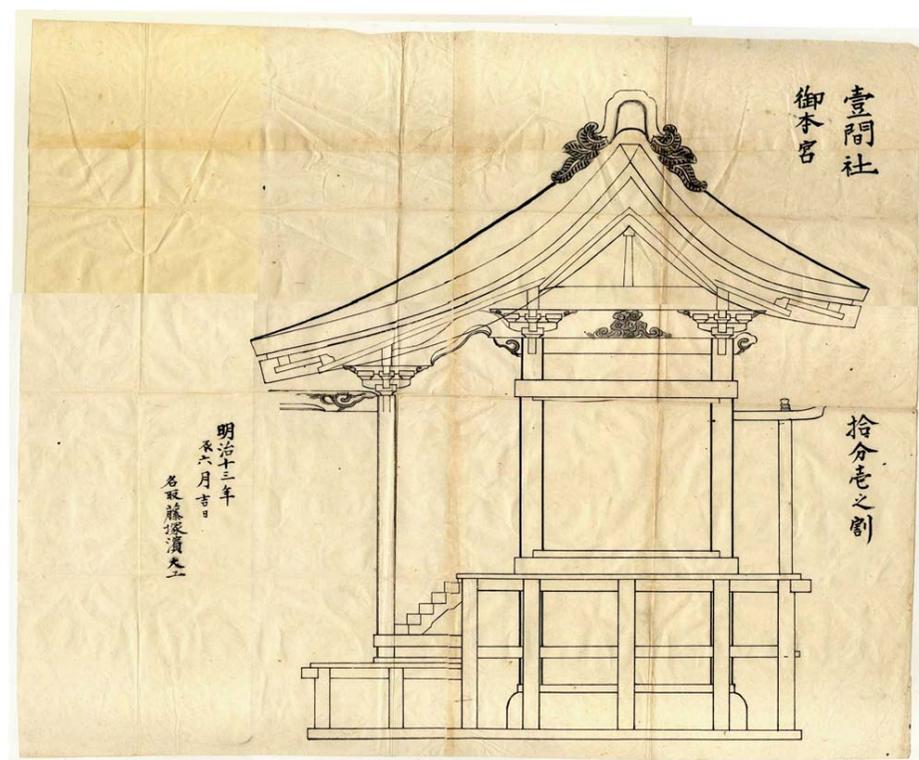
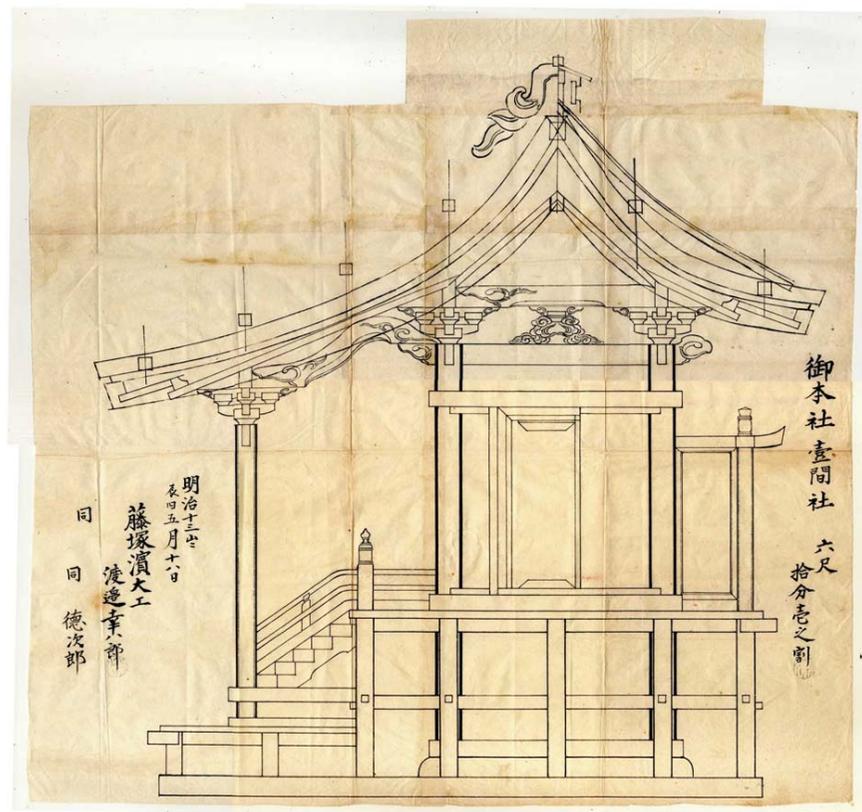
湊四社大明神明細

《湊神社 設計図》

旧社殿は明治13年の火災により焼失し、その後再建されています。これは再建時の設計図面の一部で、側面図のみが残されています。

構造は流造ながれづくりの一間社、平入りで、側面図から見た屋根形状は対称形ではなく、正面側の屋根を長く伸ばし、屋根にはゆるやかな勾配こうばいがつけられています。図面からは屋根の部材は明確ではありませんが、茅葺かやぶきとされ、その後銅板葺どうばんぶきに葺き替えられています。側面の破風はふは装飾され、緩やかな曲線を描いています。

側面図からは、特殊な構造を持つものではなく、この時代によく見かける一般的な建築物でした。



はいでんならびにそとまわりびょうがさ

《湊神社御拝殿並外廻屏笠修繕有志簿》

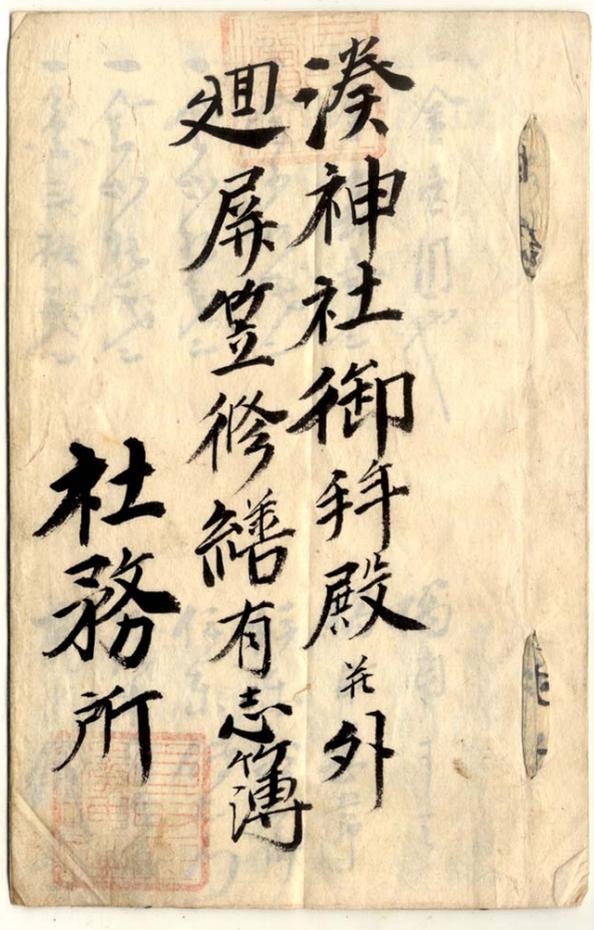
拝殿と外廻の修繕に伴う工事費用の寄付記録。金額、氏名を記載しています。明治13年の火災に伴うものかは年号の記載がないため、不明です。

ふなだま

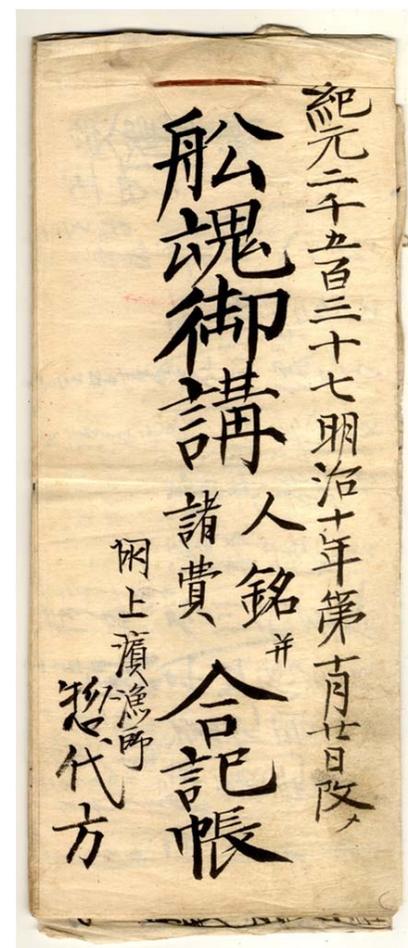
《船魂御講人名並諸費合記帳》

紀元二千五百三十七 明治10年(1877)

閑上の船には、船魂(船霊)様を祀る場所が必ず作られ、初漁の時には必ず神官を招いて、大漁と海上での安全を祈願しました。上町、中町、新町の船主による講の参加者名簿と加入料などの記録です。名簿には鮭網漁の小舟船主の名前も多くあり、当時鮭漁が盛んであったことが分かります。



湊神社御拝殿並外廻屏笠修繕有志簿



船魂御講人名並諸費合記帳

《富主姫神社祭典記簿》

《富主姫神社村社々内江移転諸費用並祭典諸入費簿》

祭典記簿は明治 10 年(1877) 諸入費簿は明治 18 年(1885)

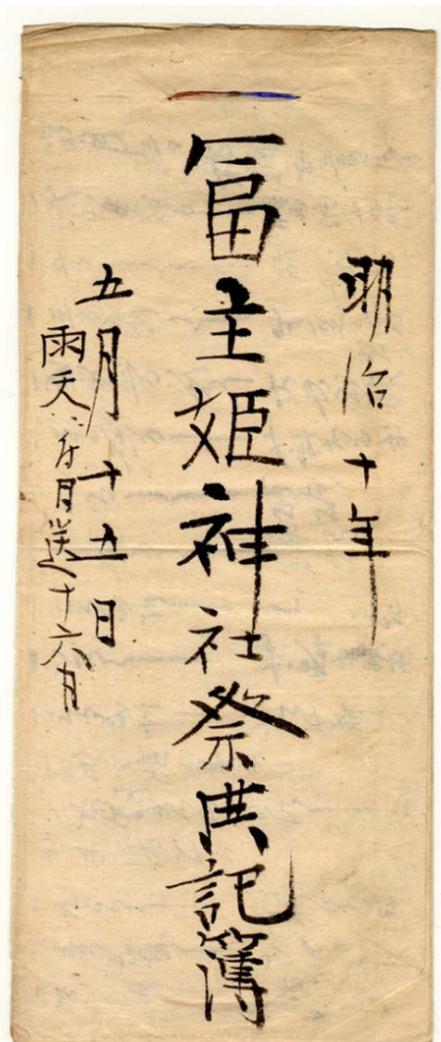
富主姫神社は元は弁財天を氏神様として祀っていたもので、富主島（宮下橋付近）に移され、明治以降は市杵島姫命いちきのしまのひめのみことを祭神として整備しました。その後貞山堀の工事に伴い一時期富主旅館への移転を経て、明治四十一年に湊神社へ合祀ごうしされたと伝えられています。

今回の資料は、富主姫神社の祭礼に関する諸費用の記録と移転した時の諸費用、遷座せんざの費用などを記録したもので、富主姫神社は明治以降湊神社の管理下にあったこと、明治十八年に村社内へ移転したことが分かります。

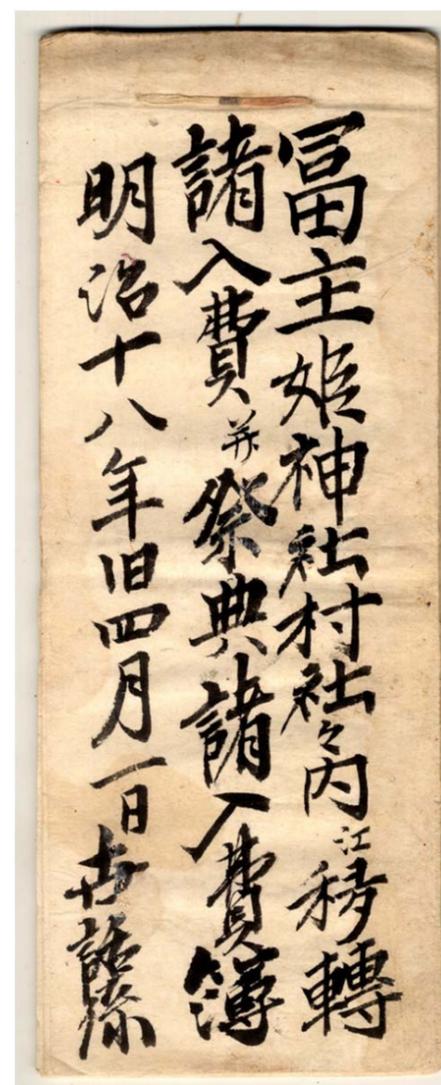
神社は大正九年日和山が築かれると、その頂いただきに移されました。



震災前の富主姫神社



富主姫神社祭典記簿



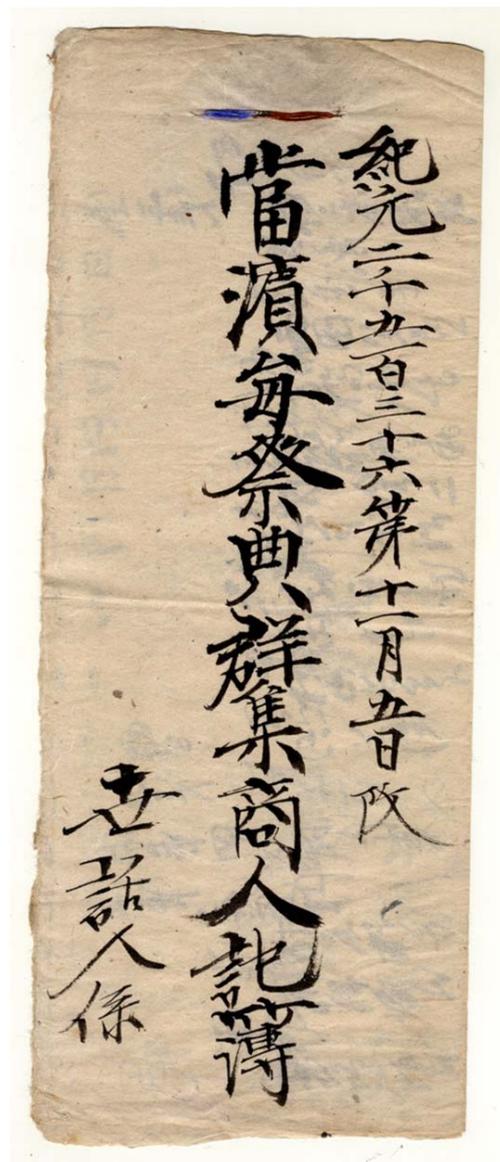
富主姫神社村社々内江移転諸費用並
祭典諸入費簿

《當濱每祭典群集商人記簿》

紀元二千五百三十六第十一月五日改 明治9年(1876)

「^{こうき}紀元=^{にほんしよき}皇紀」は日本書紀の紀年に基づき、^{じんむ}神武天皇即位の年を元年と定めたもので、皇紀元年は西暦の紀元前 660 年となります。明治5年(1872)に、それまでの太陰太陽暦（旧暦）を改め、太陽暦（新暦）に切り換える時に、あわせて皇紀を制度化しました。

閑上で行われる祭りに際しての記録で、所属する村名、氏名、金額などを記しています。



當濱每祭典群集商人記簿

とうこういん 《東光院 通行手形》

しゅげん
修験(道)は密教との関係が強く、鎌倉時代後期から南北朝時代には、独自の立場を確立しました。しんとう
神道色も見られますが、独立した宗教ではなく仏教の一派としてとらえられています。

修験道の流派は大きく分けて、しんごん とうざんは てんたい ほんざんは
真言系の当山派と天台系の本山派に分かれています。修験は一般民衆との関わりを強く持っていた点で従来の仏教とは性格が異なり、修験者(山伏)は修行のために国を離れ移動することも多いため、他地域の情報源としても重要な役割をはたしました。

閑上には修験の寺として、だいせんだつ まつじ
本山派の大先達東光院の末寺「閑上濱 大光院」がありました。ひご あまごい せいてん むしよけ ごこくほうじょう
東光院は仙台藩の庇護を受け、雨乞・晴天・虫除・五穀豊穰の諸祈禱などを命ぜられていました。また当地在住山伏や修験者を統率し、幕末までさんけい かん もん
大峰山や熊野山参詣の通行手形「ばち」を1貫3百文で発行する特権を持っていました。

明治元年(1868)の神仏分離令に続き、明治5年、修験禁止令が出され、またはいぶつきしゃく がらん
廃仏毀釈により伽藍、仏像なども破壊されました。修験の末院のなかには仏教色を薄めて神官となった例も多く、大光院も明治期には湊神社の神官として残りました。これがこれらの修験に関わる資料が残された理由です。

この文書は、山伏が大峰山・熊野山での修行に おもむ
赴くために通行手形として発行したもので、はこねせきしよ よこめ
箱根関所 横目宛発行されています。横目は、関所の最高責任者であるばんとう
伴頭を補佐する役割を持った役人で、関所内での業務遂行の監督をする立場にありました。

これらの資料は修験の統制を考える上でも、また修験の終末、閑上の歴史を復元するためにも貴重な資料であることが分かりました。

弘化四年(1847)十月

だいほんにゃはら みつたきょう
大般若経は「大般若波羅蜜多経」の略称で、中国唐の時代、げんじょう玄奘三蔵がインドより持ち帰り、633年に漢訳した教典です。日本へ伝来した大般若経は、「鎮ちん国の典、人天の大宝」といわれ、じょさいしょうふく国家安穩・除災招福・ついぜんぼだい現世安穩・追善菩提を目的に、てんどう しんどう写経、版本、転読、真読が盛んに行われるようになりました。この600余巻の教典を読経する大般若会が真言・天台等の密教系宗派や禅宗においても盛んに行われました。

ここに紹介する文書は、大光院がこの600巻の費用負担が大きいため助力を求めた時の明細帳で、寄進者の子孫繁栄・現世安穩・家内安全・先祖菩提の供養のためであることが、大光院のちじ知事(寺院内での経営的な管理部門の責任者)名で書かれています。天保から弘化にかけて天候不順による干ばつや洪水、地震などが続く時期で社会不安も大きく、現世利益的なものが強く求められた時期でもあ

りました。

寄進を求めている範囲は広く、旧東多賀村を中心に大曲村、小塚原村、増田村、下増田村、高柳村などの明細帳があります。その他四郎丸村、今泉村、二木村などの名前も見え、広範囲に寄進を求めていたことが分かります。また増田村には東光寺の流れをくむ広積院があり、本末関係の組織を利用し、末寺の住職にも協力を求めたものでしょう。

おみこしさいこう 寄進者
《湊大明神御神輿再興 寄進面附牒 諸品入料扣牒》
きしんめんつけちょう ひかえちょう

慶応2年(1866)

神社の神輿を再興した時に、神輿を飾る部品、代金などについての明細とその時の寄進者の氏名を記録したものです。明治になる直前ですが、まだ「湊神社」ではなく「湊大明神」として記されています。閑上濱ではすでに上町・中町・新町とあり新しい町割りができていたことが分かります。

また寄進者の明細には、地引瀬主せしゅ、五十集人いざぼなどの名称を見ることができます。五十集人は江戸時代には問屋がありましたが、明細には特別な表記は見られず、この時期にはすでに問屋はなく個人で扱う行商人としての形態であったものと思われます。

(瀬主は、船主のこと。五十集については、[2.災害被害と文化財の今](#) をご覧ください)

②【建 造 物】

○貞山運河(貞山堀)

貞山運河（貞山堀）は、仙台湾沿いの塩竈市・七ヶ浜町・多賀城市・仙台市・名取市・岩沼市の5市1町にまたがる延長33kmの運河で、阿武隈川の河口（岩沼市納屋）から松島湾（塩竈市牛生）までの間を結んでいます。開削工事は、近世初頭（1600年以降か）から明治22年（1889）の間に、北部・中部・南部の各区間が3時期に分けて行われ、完成した運河は仙台藩祖伊達政宗公の法号「貞山公」にちなんで「貞山運河」と名付けられました。はじめに開かれた南部水路（名取川河口の閑上～阿武隈川河口の岩沼市納屋間15km）は木洩堀を改修したもので、主に仙台城下への建築資材の運搬等に利用されたと言われていいます。

次いで寛文4年（1664）～寛文13年（1673）に開かれた北部水路（松島湾の塩竈市牛生～七北田川河口の蒲生間8km）は御船入堀と言われ、蒲生から仙台城下苦竹への御城米運搬等に利用されたと言われていいます。残りの中部水路（蒲

生～名取川河口の藤塚間10km）は新堀と言われ、明治初期に開削工事が終わり、この段階で全運河約33kmが一応開通しました。その後、明治16年（1883）～明治22年（1889）には、野蒜築港に伴う北部・南部水路の大幅な改修が行われ、併せて東名運河（鳴瀬川河口～松島湾まで）・北上運河（北上川河口～鳴瀬川河口まで）も開削されました。これにより阿武隈川河口から北上川河口までの49kmが一つの線で結ばれ、蒸気船も運航されるなど全盛期を迎えましたが、鉄道や道路など陸上交通機関が整備されると、運河としての役割は衰退しました。

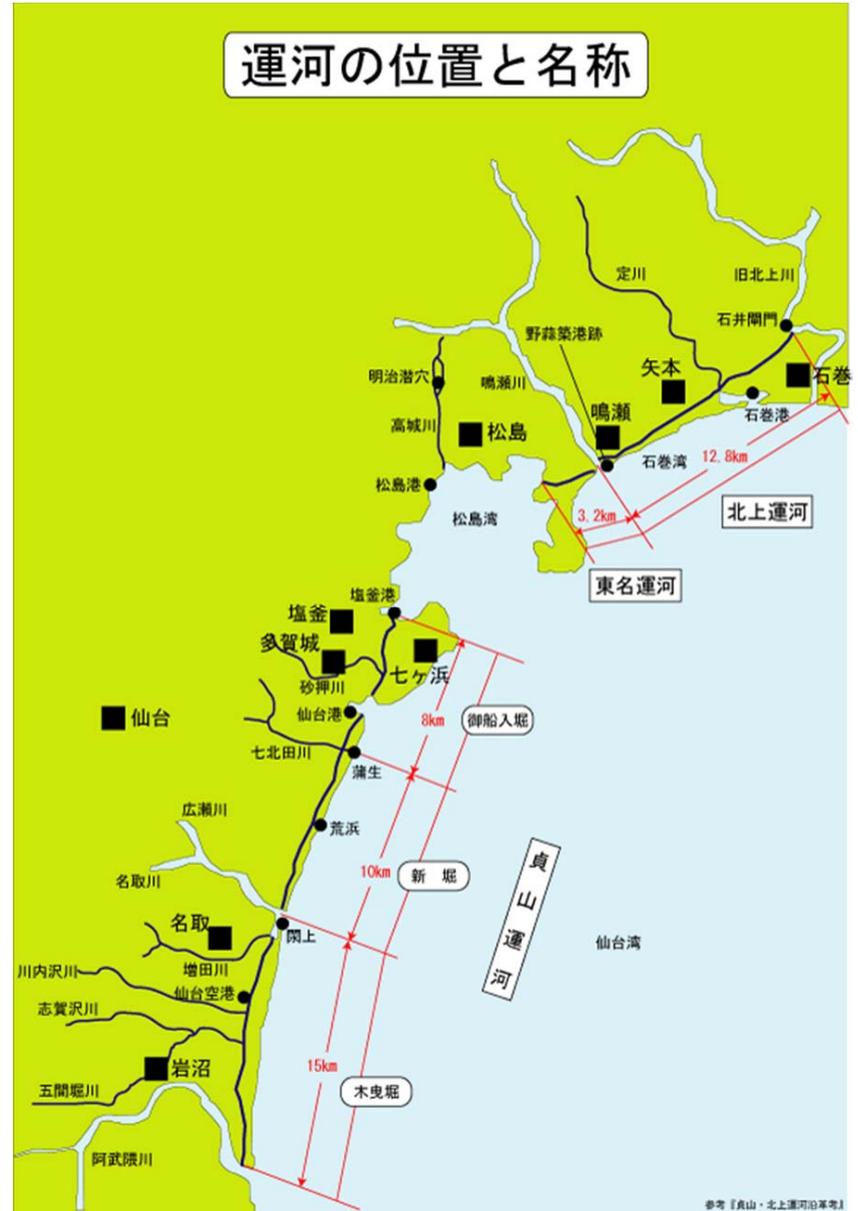
震災の際には、津波により運河内に大量の瓦礫や土砂などが流入し、両側の護岸が破壊されたり、運河にかかる橋なども流されたりするなど大きな被害を受けました。平成25年5月には宮城県により、運河の復興に向けた『貞山運河復興ビジョン』が作成され、現在もその復旧に向けた工事などが行われています。



被災前の貞山運河のようす



被災後の貞山運河のようす



○市登録 開運橋

開運橋は昭和3年（1927）に貞山堀に架けられた、現存する市内唯一のアーチ橋で、近代文化遺産の1つでした。橋長30.72m・幅員3.3mの鉄筋コンクリート製の橋で、昭和初期からの歴史を持ち、貞山運河やかつての閑上の街の風情を今に伝える貴重な橋として親しまれ、名取100選にも選ばれていました。昭和53年6月に発生した宮城県沖地震の際に床盤の一部が落下してしまっただため、その後は歩道橋として利用しており、平成元年（1989）には、市による補強・補修工事も行われ、最近までその端整な姿を見ることができました。しかし、津波により橋全体が落ちて流されてしまいました。その後、残念ながら現状を回復することが困難なため、平成24年10月1日付けで市の登録文化財から解除されました。展示ケース内の鉄製のプレートは、平成元年の補修工事の竣^{しゅんこう}工時に設置されたもので、震災後に貞山運河内から回収されたものです。



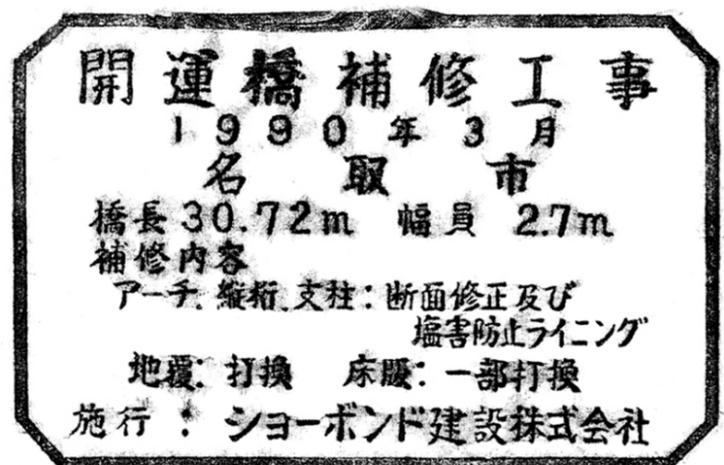
震災前の開運橋



津波で貞山運河に落下した開運橋の一部



被災後の入口付近のようす



回収された開運橋補修工事のプレート

《耕龍寺山門》

谷田山耕龍寺は、伊達家 11 代の伊達大膳大夫持宗公の 5 男 天初薬源和尚を開山とする曹洞宗のお寺で、聖観世音を本尊として祀っています。この耕龍寺にある山門は、仙台藩の家老を務めた片倉家の居城であった白石城の門の一つを、明治初め頃に現在地へと移築したと言われているものです。伊達家・片倉氏との関わりや、市内に現存する数少ない近世武家造の建築物としても貴重であるため、平成 2 年に名取市の指定文化財になっています。総ケヤキ素木造りの門で、屋根は切妻造りの棧瓦葺き、大棟の 3 箇所伊達家の家紋瓦(三ツ引両紋)を使用し、平成 5 年の修復以前は、四隅の降棟の止め瓦として大形(約 70 cm)の獅子瓦が飾られていました。

震災により、山門は向かって右側の袖塀の倒壊、柱位置のずれや傾斜、漆喰の亀裂・剥落などの被害があり、そのほかに寺の本堂や庫裏も大きな被害を受けましたが、現在は修復のための工事も終了しています。

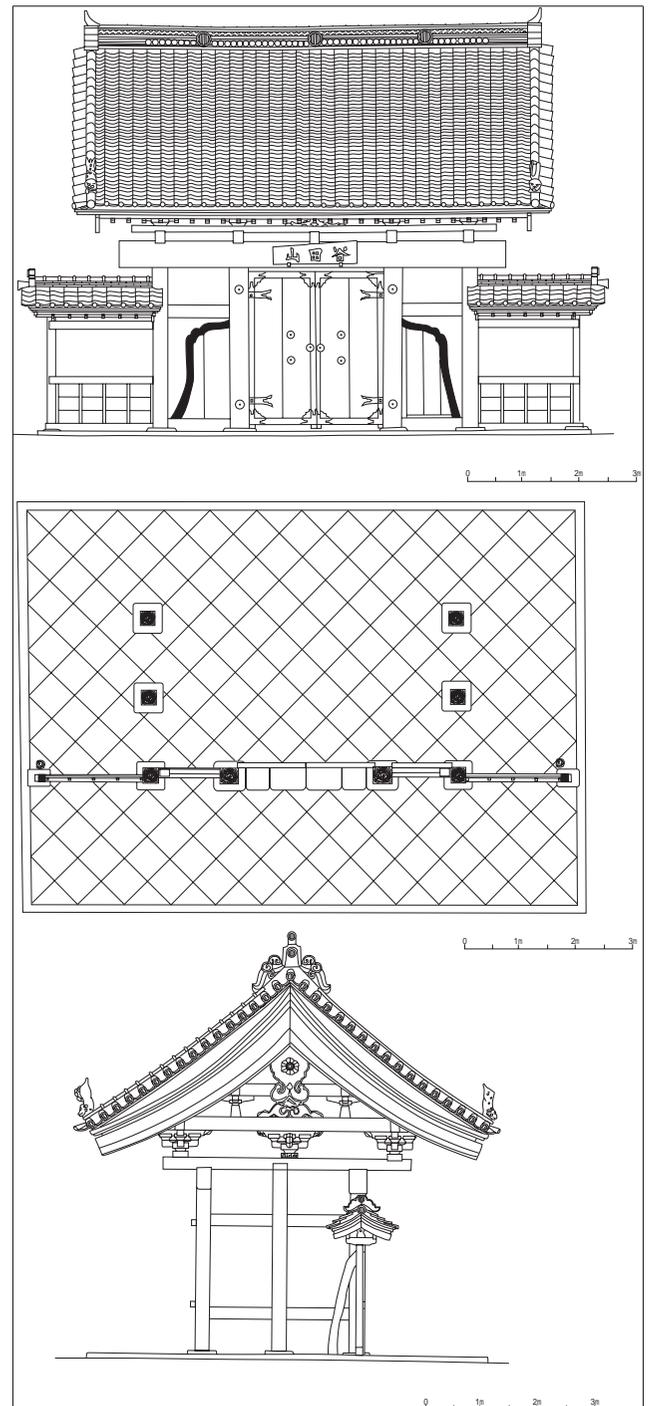
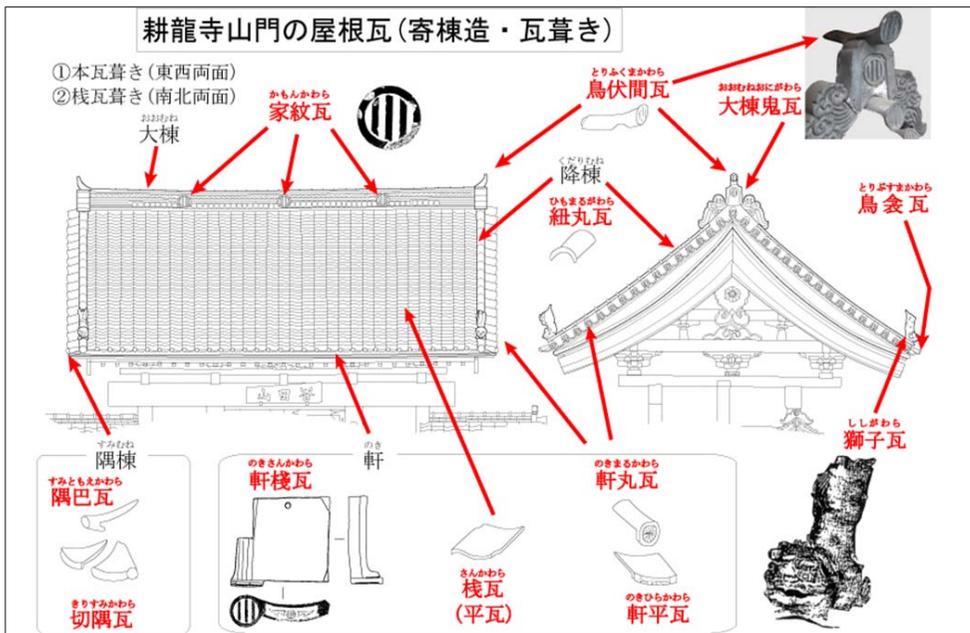
なお、境内には伊達持宗公夫妻の墓と伝わる江戸中期頃のものと思われる五輪塔(市登録文化財)も 2 基あります。



震災で倒壊した袖塀



倒壊した袖塀



○神社仏閣

《湊神社》

湊神社については、②湊神社文書 解説をご覧ください。



震災以前の湊神社



震災後に湊神社跡地に置かれた石造狛犬

《持法院》

龍石山持法院は、京都の智積院を本寺とする真言宗智山派の寺院で、本尊には不動明王を祀っていました。慶応3年（1867）に建てられた茅葺の本堂は、解体・投棄されて名取川河口に漂着した原田甲斐（伊達騒動の中心人物とも言われる）の屋敷の部材を拾い上げ、これを建築材に用いて建てられたものだと伝えられています。また、本堂前にあったお地蔵様は、原田甲斐の供養のために造立された影仏で、顔も似せて造られたものだと興味深い伝承もあります。しかし持法院も、津波により残念ながら流失してしまいました。



現在の持法院跡地のようす



持法院に奉納されていた宝剣形絵馬

《東禅寺》

龍雲山東禅寺は、元亀4年（1573）に、茨城県那珂郡大場村常秀寺4代の休山全応和尚が開山した曹洞宗の寺院で、本尊には釈迦牟尼仏を祀っていました。ところが、明治維新後に本寺である常秀寺が廃寺となったことから那珂郡額田村鱗勝院の末寺となりました。しかし、詳しい経緯は不明ですが、その後に仙台市林松院の末寺となったと言われています。津波により壊滅的な被害を受け、跡地には周辺から集められた仏像類や石造物などが現在も残されています。



現在の東禅寺のようす



元禄10年(1697)の念仏供養塔

「名取閑上濱」の文字が刻まれている

《富主姫神社》

富主姫弁才天とも呼ばれ、閑上上町伊藤家の先祖が房州沖で海難に遭った後に、琵琶湖にある竹生島弁財天に祈願したところ無事帰郷することが出来たことから、これを勧請して氏神としたのが始まりと言われています。この弁財天の祭日に漁に出た船が海難に遭ったことで浜中こぞって祀るようになり、伊藤家から宮下橋南側の富主島へ遷座されたと言われています。

震災後修復され、現在の閑上を一望できる場所にあることから、大勢の人が訪れています。



震災前の富主姫神社（日和山山頂）

《天正院》

天正院(天照院)は、元禄 2 年(1689)に東海林行者により開山された修験道で、出羽 羽黒山修験の行堂であり、信仰する月山(阿弥陀仏)・羽黒山(観世音菩薩)・湯殿山(大日如来)と蔵王権現が祀られていました。出羽三山へ参詣の際は、ここで斎戒沐浴して修験者から祓いを受けて一夜を過ごし、出発の準備をしたので一般には「行屋」と呼ばれるようになったようです。



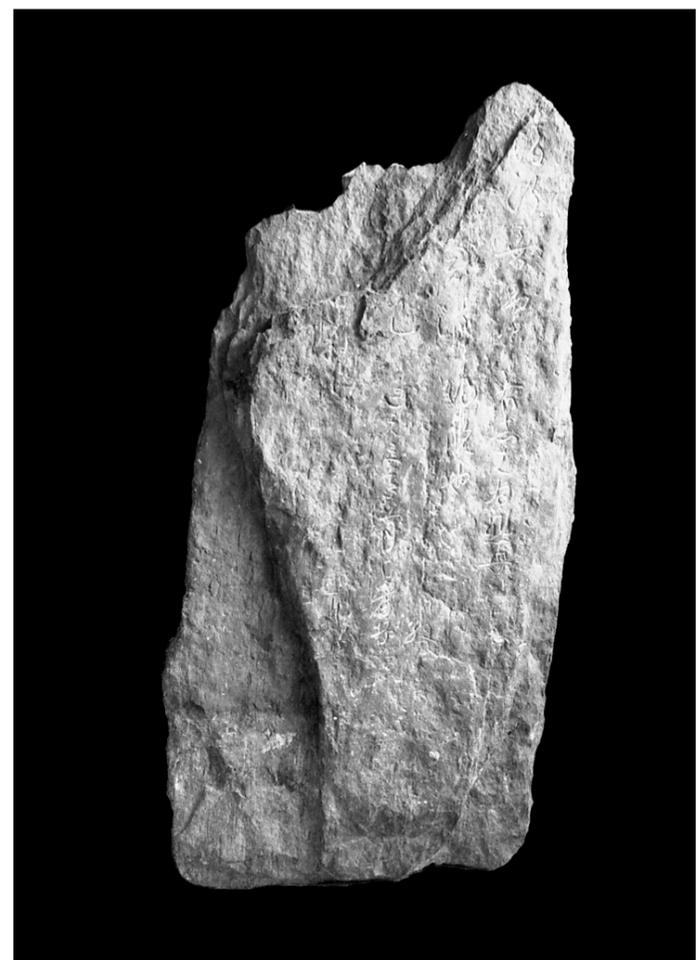
天正院跡地の脇に集められた石碑

《観音寺》

淘上山観音寺は真言宗の寺院で、明治 20 年代の火災で開山以来の記録類が焼失し詳しい由緒は不明ですが、天正 10 年(1582)8 月に宥遍が開山、享保 20 年(1735)五世の弘運の開基と伝えられています。京都智積院を本寺とし、十一面観音が本尊として祀られていました。火災による焼失後の本堂は、明治 29 年(1896)の三陸津波の際に漂着した木材を漁師などが拾い集め、これを建築資材に用いて明治 31 年に完成したものだと言われています。観音寺には、本尊の十一面観音のほかに、立像・座像の 2 体の十一面観音菩薩像や、金剛界・胎蔵界大日如来像、阿弥陀如来像、白象に乗る普賢菩薩像などの多くの仏像類が残されていました。また、昭和 12 年 5 月に新築された子安観音堂内には、市内では数少ない粘板岩（薄く板状に割れる石材で、この周辺では石巻周辺で多く産出される）製で延元 3 年(1338)の記年銘が刻まれた板碑（中世の供養塔の一種）もありましたが、残念ながらこれらの文化財は津波で失われてしまいました。



現在の観音寺跡地のようす



延元 3 年(1338)の板碑

《加羅田仙子安地蔵堂》

安永年間（1772～1780）に、仙台藩が領内の村の様子を把握するために作成させた「風土記御用書出」の中に、「牛野村風土記御用書上」があります。これによれば、「牛野」はもともと「宮野」であったが、村鎮守八幡の使いである水牛が住む牛沼にちなんで、後に「牛野村」としたと記されています。風土記によれば、子安地蔵堂は、平安時代の寛弘2年(1005)に恵心僧都（源信）により造られたとされており、その周辺には、地蔵田と呼ばれる地蔵堂を維持するための水田もあったようです。お祀りされている延命子安地蔵菩薩（牛野子安地蔵）は、現在でも子供が欲しい夫婦や安産を祈願する夫婦が多く訪れており、子供が欲しい時はコンブクロ（巾着）の口をあけて奉納し、子供が生まれない時は口を閉めて奉納するという風習があります。

また、地蔵堂には、明治時代から昭和にかけて奉納された80枚近い絵馬も残されており、塩釜・仙台・岩沼・船岡などの遠方からも多くの人がお参りに来ていた様子が分かります。



牛野地蔵堂のようす

《下増田神社・観音寺》

下増田神社は、詳細は不明ですが明治の神仏分離の際に天台宗本山派大乘院を廃し、その後、新明社とも呼ばれていたようです。

大乘院は、伊具郡藤尾金津（角田市）の鬼越山東光寺の末寺で、出羽羽黒山修験道場の一つに数えられています。明治42年には飯塚の雷神社・熊野社を合祀して、下増田神社と名が改められ、下増田村（下増田・杉ヶ袋・耕谷・北釜が合併）の村社になりました。また、観音寺は真言宗熊野山新宮寺の末寺で、住職は閑上観音寺の管掌ですが、下増田本村の東光寺が代理で管掌していました。嘉元年間（1303～1305）頃に熊野新宮寺学頭の道寛和尚が創建したもので、本尊は薬師如来だとも言われていますが、これらの伝えは記録も残されていないため詳しいことは分かっていません。

震災前にあった本堂や千体仏を祀る地蔵堂は残念ながら津波により流出してしまいましたが、現在は仮の本堂が建て直されています。また、地蔵堂の脇にあ

った芭蕉の句碑と、この碑の建立に関わった高橋沙水（松廼本沙水）の碑も、震災後に建て直されました。



現在の下増田神社のようす



現在の観音寺跡地のようす



建て直された芭蕉の句碑と高橋沙水の碑

③【民俗芸能】

○錨祭と錨

この祭絵図は昭和 20 年代に模写されたもので、右下には「筆者不明安政年間以前閑上浜大漁祈願 錨祭ノ図 領内祭集 ヨリ 武陵写」の詞書があります。安政年間(1854~1859)以前から閑上浜では大漁を祈願し錨を供養する行事のあったことが書かれています。この図以外に詳細な記録や文献が確認されてい^{はんそ}ないため正確な内容は分かっていません。絵には「譯曰、一説ニハ藩祖公、漁ヲ好ミ年ニ二回ハ閑上浜ニ成ラセラレ其盛夏ニ領内漁業ノ大漁ヲ祈願シ、錨ヲ供養シタル行事ヲ後々^{むらうち} 邑内ノ大祭トナリタリ云々」とあり、『伊達治家記録』によれば元和四年(1618)9月16日に伊達政宗が「^{ゆりあげ} 淘上浜ニ鮭漁ヲ見ル」との記録があり、この頃が始まりかもしれません。

「後に邑内の大祭となった」とあり、絵図中にある「^り いか里大祭」として始まり、閑上濱の大祭として続けられ、昭和初期の「湊まつり」へと変容し、続けられたものと思われま

す。錨を中心に据えて、祭りに参加する者は皆頭上に魚の型取りを付けています。太鼓、笛で拍子をとりながら山車の上で踊る者、錨を引く者、後方には小型船を引く者も見えます。この船を引く様は名取市の無形文化財「大漁唄込み踊」の中で船を曳き踊る様と重なります。

このような形態のお祭りは近辺の沿岸地域を見ても残っておらず、全国的に見ても珍しいものといえます。



安政年間以前開上浜大漁祈願錨祭

《熊野神社 錨》

錨祭りに使用したと伝わる「錨」が、熊野神社に保管されています。全長 2.22m、重さ 130 kg のもので、奉納の経緯を記録するものではなく詳細は不明ですが、熊野神社宮司によると「昭和初期に閑上の人が神社境内に奉納した」と伝えられています。

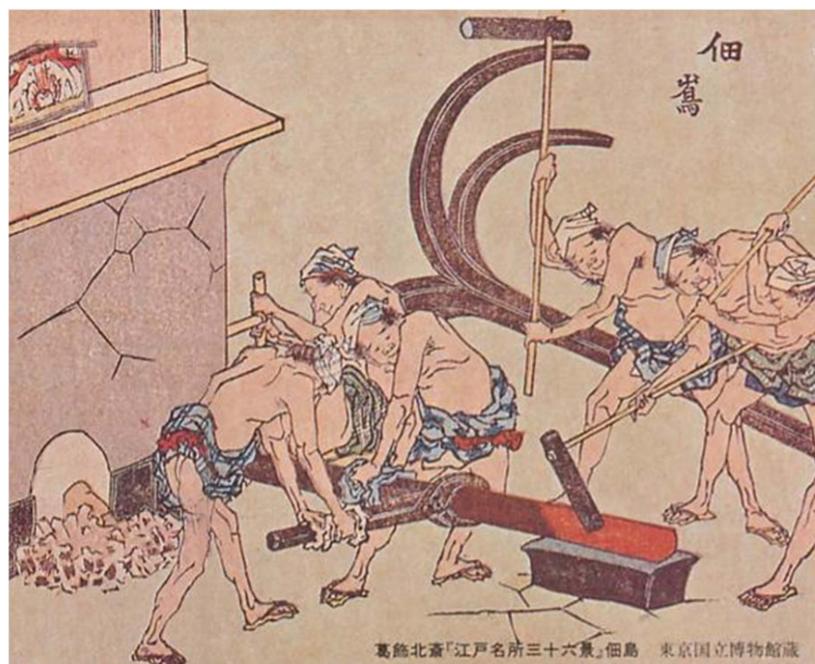
めでしまあずきしましみずみね
大、小の錨のうち、一つは愛島小豆島清水峰神社に奉納されました。その後、この錨は戦争中の金属回収で供出きょうしゅつされてしまい現存しません。熊野神社の錨はその大きさから運び出すことができず、残ったことが伝えられます。

よつめてついかり
4つの爪をもつ錨は四爪鉄錨と呼ばれ 17 世紀中期以降に広く普及し、主に江戸時代～明治時代にかけて活躍した廻船かいせん(物資の輸送・販売を目的とする船)に採用されました。この時期は閑上で錨祭りが行なわれていた時

代と重なります。この錨が錨祭絵図のものと同じのものか確実ではありませんが、錨が安政年間以前のものであれば、祭りが行われた貴重な資料となります。



熊野神社にある錨



江戸時代の錨作りのようす

2 枚の鉄板を鍛造して接合し、それを 2 つに裂き広げて爪形に成形する

《関上 錨(唐人錨)》

19世紀後半から四爪鉄錨は衰退し、近代に入ってからには唐人錨とうじんびょうと呼ばれる錨あなが使われるようになります。唐人錨は二つの爪の間に設けられた孔に木の棒などを差し、四爪錨のような形態で使用されました。この大小の錨は、関上浜の船で使用していたもので、民俗文化財として寄贈を受け保存していたものです。

唐人錨そのものは細部の変化はあるものの、基本的な形は変わらず現在でも使用されています。展示する錨を使用していた正確な年代は不明ですが、昭和初期には使用していたものと思われます。

写真は昭和8年5月15日 春日丸の進水式のもので、写真右下に四爪錨と唐人錨が置かれています。写真の四爪錨は人物との比較から1.5m前後のものであったと思われ、唐人錨はそれよりも小ぶりであったことが分かります。錨の大きさも、船の規模や漁の種類によって異なります。



春日丸の進水式昭和8年5月

画面右に四爪錨がある (むかしの写真集関上)

○みなとまち閑上

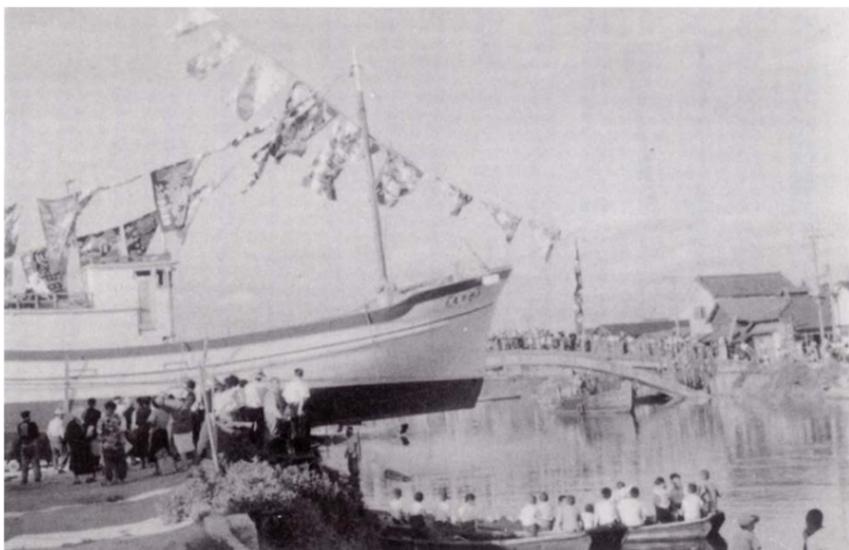
閑上港は、名取川の河口に発達する砂州の入り江を利用して作られた港です。漁業の様子を書き留めた文書が少なく詳しい内容を知ることはできませんが、基本的には田畑を伴う農村であり、半農半漁よりは農の比率が高い、ごく小規模な漁が営まれていたと推測されます。

江戸時代になると、仙台藩直轄の漁港として、また貞山堀を利用して木材や生活物資の運搬が行われ、交易の港としても活躍しました。

明治期になると現在の漁協につながる組織がつくられ、大正期には動力付きの漁船も操業するようになります。名取川河口では鮭捕りの流網・地引網ながしあみ じびきあみなども行われ、北上川、阿武隈川に並ぶ漁獲高を上げていました。昭和に入ると戦後の人口増加をうけて閑上の漁業は最盛期を迎え、小売りや農業との兼業などを含めると地区住民の8割近くが漁業に従事していたそうです。閑上港を根拠地とする漁船は仙台湾、金華山沖、福島県沖を操業区域としてカレイやキチジ、イワシな

ど様々な魚を水揚げしました。

ほかの漁港に比べ仙台に近く、新鮮な生魚を届けることができた閑上港でしたが、流通や漁法の変化、後継者不足などによって、昭和30年以降は漁業人口が激減し、小型底引き網や巻き網漁業が中心となりました。漁業の規模は縮小しましたが、港朝市や港まつり、大漁唄込み踊など、港町としての文化は現在まで引き継がれています。



船おろし 昭和32年

(むかしの写真集閑上より)



開運橋より望む貞山堀 (昭和3年以降)

(むかしの写真集閑上より)

イサバ ○五十集

なかがいにん

元は魚の間屋や仲買人を表す言葉でしたが、閑上では女性を中心とした個人
の行商人のことを呼びます。大正時代には一般的な仕事となっていたようです。
五十集は港で水揚げされた魚を籠に背負い、閑上街道を通り、家々を回りながら
仙台や岩沼、茂庭、槻木つきのきへと歩いて行商しました。女性たちの多くは漁夫の女房
であり、夫の収入を補うための仕事でもありました。その数は300人を超したと
いわれ、昭和40年代まで続けられていたようです。

もとは漁夫に分配された魚と、米や麦・雑穀などの物々交換が始まりであった
ようですが、時代が進むにつれて行商となりました。五十集達は5人組で保証金
を積み、ほかの仲買人と同様にせりに立って仕入れを行いました。「五十集は売
るよりも買うほうが難しい。どれだけ邪魔されても、他人を押しつけてでも良い
魚を買わなければならない。」（『郷土なとり』第7号）という言葉からも、男

勝りに魚をせり落としていた様子が分かります。

仕入れた魚は焼きカレイや塩干しなどに加工しました。現在の魚市場は朝売り
が主ですが、朝出港・夜帰港という夕売りの時代では、夜通しカレイを焼いて、
そのまま夜が明ける前から歩き出すということもありました。五十集たちはそれ
ぞれにお得意さんがあり、一日に10軒ほどの家を回ることもありました。五十
集達はお得意さんの好みや予定などを考慮して売りにいったので、先代、先々代
からの付き合いという家もありました。そのため、休んでいる間に自分のお得意
さんがほかにとられるのを嫌い、妊娠中でもボテザルを背負い行商へ向かいまし
た。



五十集の女性たち 昭和2、30年代以降

(むかしの写真集閑上より)



せりの様子 昭和50年代頃か？

(閑上風土記より)

○ボテザル（荷ザル）

魚の行商人は蒲生・荒浜・塩釜など各地にいましたが、閑上の五十集はボテザル（荷ざる）と呼ばれる独特の形態の背負籠せおいかごを背負っていたので、ひと目見ただけで閑上からの五十集であると分かったそうです。

ボテザルは上が広く、下は細い円筒形で、中には丸い竹製の皿をひっかけるように置いて三段に分け、一番下にはガンガン（金だらい）にいれた生魚、二段目の皿には塩干しにした魚、一番上の皿には焼き魚を入れる、というよう使いました。写真によっては蓋の上にさらに箆が伏せてあるものもあり、一度に多くの商品を傷めずに運ぶことができました。

また、イワシが大量にとれる8月9月になると、イワシはすぐ悪くなるので、女ではなく足の速い男五十集が走って売りにいきました。2つのビクにぎっしりとイワシをつめ、天秤にかけて草履もはかず、半纏一枚で、落ちた魚も気にせず走ってお得意さんのところへと向かったそうです。そのため、街道におちた魚は

馬車につぶされたり猫に半分食われたりして一帯が生臭くなり、よそから来たひとには「ゆらげ(閑上)さくっど、まづがっしゃ(町頭)から魚くせ」といわれたそうです。（『郷土なとり』第5号 - おなご五十集の話(5)抜粋）



てんびん棒で籠をかつぐ男いさば

（閑上風土記より）



五十集行商の絵

（仙台史蹟作画協会伊藤武陵（画））

○五十集の道

蒲生、荒浜、閑上などの近隣の浜からは、行商人達がそれぞれの街道に沿った農村集落に魚を売りながら町場へと入っていきました。

閑上の五十集達はおもに仙台、岩沼、槻木、茂庭、熊野堂の仙南一帯を範囲としました。当時の記録で仙台までの距離は2里半(9.8 km)、岩沼で3里半(13.4 km)とあり、朝の仕入れ加工をふくめ一日がかりの仕事であったことが分かります。行商に行く回数は各人によって異なっており、二日に一回という人もあれば、週に一回泊りがけで遠方へ行くということもあったようです。

明治から昭和初期の時代、旧国道4号線の名取橋より下流には橋がなかったため、渡し船が利用されました。仙台方面へ向かうには、

①太白区郡山字欠ノ上一袋原間

②若林区日辺にっぺ一太白区四郎丸字落合間

③若林区藤塚一閑上間

の3つの渡し場がありました。閑上や六郷村にすむ人達には、「すくい」と呼ばれる制度があり、年に2回米や麦などを納めることで日々の賃料が賄われていたそうです。また、大正15年から昭和13年の期間は閑上から増田の間を増東軌道ぞうとうきどうと呼ばれる機関車が走り、閑上港の海産物が東北本線経由で仙台に運ばれるようになりましたが、運賃が往復50銭以上もかかるため、ほとんどの五十集は歩いて行商を行いました。昭和に入ると徐々に渡し船は廃止され、昭和47年、閑上大橋の竣工と共に完全に廃止となりました。



上町の県営渡し舟乗り場 昭和 30 年代初期

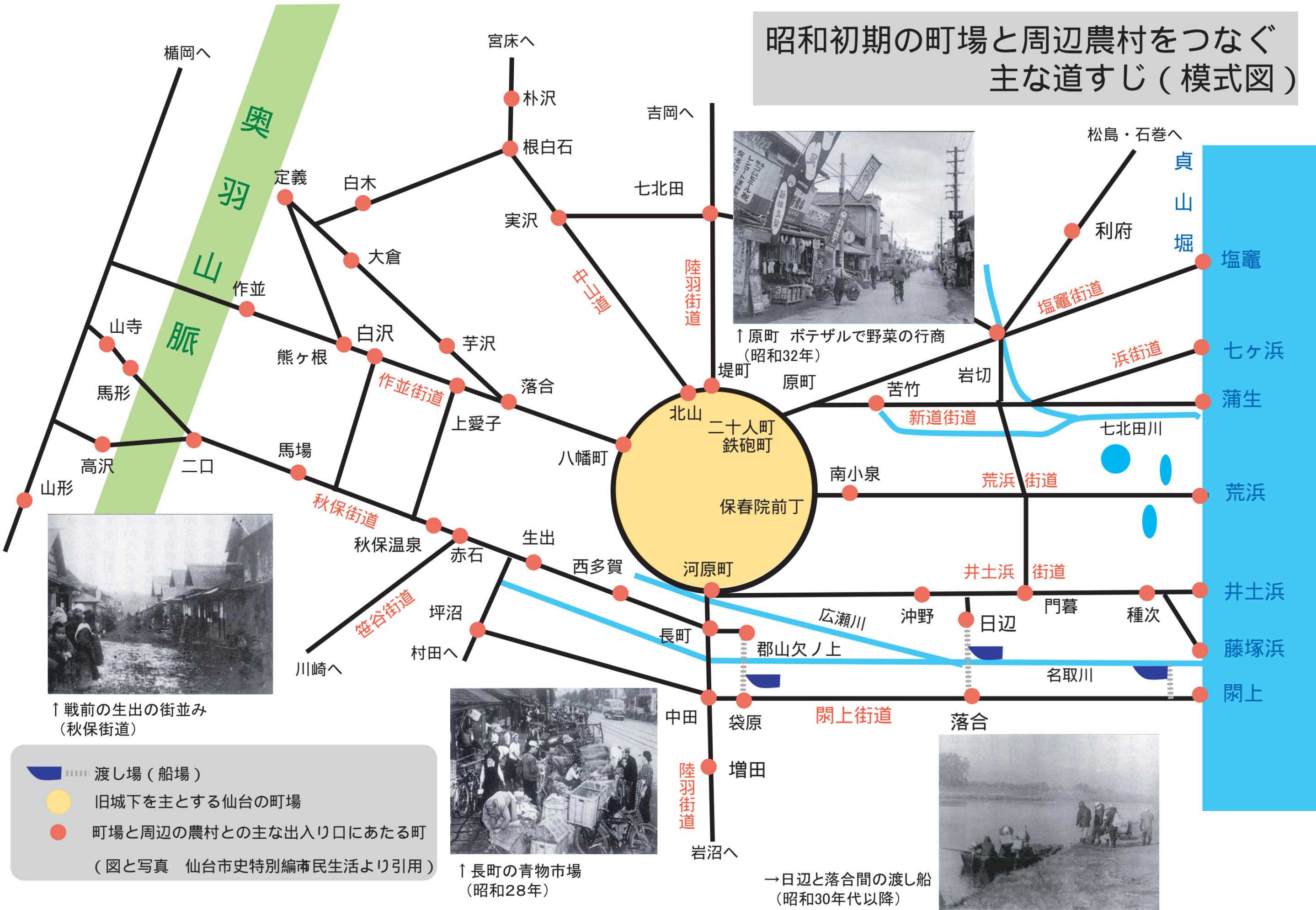
(むかしの写真集関上より)



行商ようす (昭和 40 年代ごろか?)

(わたしたちの名取市より)

昭和初期の町場と周辺農村をつなぐ 主な道すじ（模式図）



↑原町 ポテザルで野菜の行商 (昭和32年)



↑戦前の生出の街並み (秋保街道)



↑長町の青物市場 (昭和28年)



→日辺と落合間の渡し船 (昭和30年代以降)

-  渡し場（船場）
-  旧城下を主とする仙台の町場
-  町場と周辺の農村との主な出入り口にあたる町 (図と写真 仙台市史特別編市民生活より引用)

○市指定民俗文化財 閑上大漁唄い込み踊

名取川の河口に発達した漁港である閑上には、古くから「大漁唄」が伝わっており、藩祖伊達政宗公が閑上の浜を散策された際に、土地の漁師達が披露したと言い伝えられています。一方、「大漁祝唄」は、明治初期に千葉県の銚子港より伝わり、当地風に変化させたものと言われています。

「閑上大漁唄い込み踊」は、この大漁唄と大漁祝唄とを合わせ、踊りとして振りが添えられ風流化したものです。以前は、大漁を喜んだ漁師達が港口から威勢みなとぐちよく板子をたたき、拍子を取って魚市場まで唄い込んだと言われ、大漁にわく浜いたごの男達の心意気が唄と踊りで見事に表現されています。

昭和 29 年 11 月に東京日比谷公会堂で行われた「全日本郷土芸能コンクール」に、宮城県代表として出場した閑上大漁唄い込み踊の方々は、準優勝というすばらしい成績を収め、全国に閑上の名が知られるようになりました。

近年ではなとり夏まつりの際などに披露されていましたが、震災後に踊り手の方々も一時離ればなれとなり、使用する衣装や道具類もほとんどが流されて活動

を一時的に中断していました。平成 23 年の夏頃から少しずつ活動を再開し、現在も各地の行事などに招かれて自慢の踊りを披露しています。なお、平成 25 年 11 月 2 日（土）には、東京都渋谷区民文化祭にも出演する予定になっています。

踊りに欠かせないこの船は昭和 20 年代に閑上の船大工が造ったものだそうで、奇跡的に震災の難をのがれ今も活躍しています。

この船は細部まで忠実に復元されており、錨も当時使用されていた唐人錨が再現されています。当時使用していた船の構造などを伝えているだけでなく、錨との関係が分かるものとして貴重なものです。

11月2日・3日 渋谷区民祭文化祭に出演しました



○大漁旗

大漁旗はいつ頃から使われたのかは明らかではありませんが、沖に漁に出た船が、大漁の知らせを浜で待つ家族や仲間知らせるための合図として使用したのが始まりと伝えられています。

最初は簡単な目印のようなものであったものが、次第に遠く沖合からでも見えるよう、色使いも原色を使用した明確なデザインで、文字も大きく書かれるようになりました。遠洋漁業の増加など漁業自体の変化、無線など通信機器設置などにより使用されることは少なくなりましたが、海上の安全・豊漁に対する祈りや祝いの心が強く込められており、今日でも作られています。震災以後新造される船の思いを込めて、進水式や出漁などで目にすることも多いと思います。

大漁旗は自身で作ることもありますが、新造船の船おろし（進水式）のご祝儀として、親戚縁者や取引先、友人などから船主に贈られました。

大漁旗の構図は四つの部分に分かれています。

- (1) 大漁を祈り、祝う文字（祝大漁など）
 - (2) 船名（金毘羅丸、善宝丸など）
 - (3) 旗の寄贈者名
 - (4) 縁起物（鶴亀・宝船・鯛・旭日・七福神・富士・鷹・熨斗など）
- で構成されています。

ここで紹介した旗は 縦 118 cm 横 153 cmの生地を対角で赤、青の原色で2分し下地を作り、上部3分の1に「祝大漁」の祈り、祝い文を、中央部に「金毘羅丸」の船名を、下段に寄贈者氏名を、左肩部分に縁起物である熨斗を図案化したものを配置しています。



大漁旗

○蒲鉾

五十集の運んだ商品の中に「手のしゃ（手のひら）」というものがありません。これは手のひらかまぼこのことで、成形の時に指のあとが付いたので「手のしゃ」と呼ばれました。この頃から焼きカレーと共に閑上の名物であったのかもしれませんが、閑上では明治の初め頃から蒲鉾屋が開業されており、明治 23 年頃から漁獲された大量のヒラメを保存加工するために、練って焼いた手のひら蒲鉾が作られるようになりました。その形状から「ベロ（舌）蒲鉾」や「木の葉蒲鉾」とも呼ばれ、現在の笹かまぼこの原形となっています。

昭和 63 年 蒲鉾製造のようす



1. 頭、はらわたを取り三枚に下ろす



2. 細かくした魚肉を擂潰機にかける。調味料を加え、40分ほどかけて搗りあげる



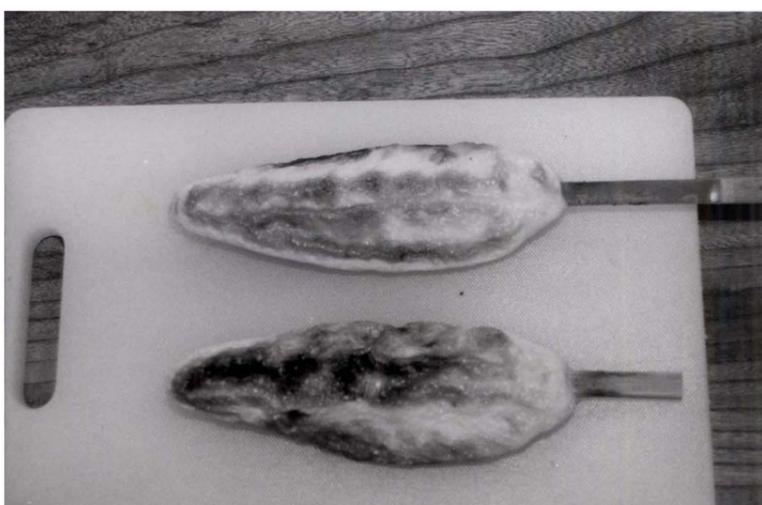
3. 成形された蒲鉾を串にさす



4. 型に入れ、手で形を整える



5. 弁慶にさし、自動焼機に並べる



6. 完成

○市指定民俗文化財 下増田麦搗き踊

下増田麦搗き踊が伝わる地域の農家では、田植えが済むと麦刈りが始まり、刈った麦を庭に並べて麦打ちをし、田の草取りが始まる頃になると、夜なべ仕事で麦搗きが行われるのが一般的でした。その際、隣近所の女たちが集まり堅杵で臼たてぎねを取り巻き、にぎやかに作業に合わせて麦搗き唄が唄われ、後に踊りも添えられるようになったと伝わっています。

江戸時代の頃、増田近郷の農民は、田植えを終えた後に亙理・相馬地方に働きに出て田植えや養蚕に従事したと伝えられています。仕事歌の一つである麦搗き唄も亙理・相馬地方からの影響を受けたものと言われ、慶長年間の頃に最も盛んに唄われていたようです。

明治9年(1876)の明治天皇東北御巡幸の際には、増田に設けられた行在所ごじゅんこうでの御休息の際に、15~20才の女子が揃いの衣装で麦搗き唄を唄いながら麦を搗あんざいしょいて天覧てんらんに供したと言われていています。こうした縁もあり、明治天皇が崩御されてほうぎよ

から丁度百年目にあたる昨年7月に明治神宮境内で行われた、「明治天皇百年祭」にも招待され、踊りが奉納されました。



下増田麦搗き踊のようす



かつて増田神社脇にあった行在所のようす

④【記念物】

○閑上土手の松並

閑上土手の松並は、名取川右岸の堤防上の名取市閑上字柳原上・柳原中ほか 地内に所在する松並みで、現在は、市道閑上四郎丸線沿いに 48 本が残っています。戦前には名取川の河口付近まであったとも言われていますが、昭和 50 年頃には 70 本前後となり、徐々にその数も減ってきています。

土手の松は、仙台藩が遠州えんしゅうから取り寄せて閑上浜と仙台城下を結ぶ名取川沿いの旧道へ植えた松並の一部で、地元の漁船が閑上港へ帰港する際に、灯台の代わりに目印としていたことから俗に「あんどん松」とも呼ばれ、樹齢は年輪から、およそ 230～250 年以上のものとも言われています。松の種類は、クロマツ（名取市の木）ですが、地元の人達はオトコマツ・オマツとも呼んでおり、日本では本州北部から九州のトカラ列島まで広く分布し、昔から海岸の防風林や防潮林として、街道沿いなどに植えられてきたそうです。この松並のように直径の平均が 75 cm 以上、高さ 25～30m にもおよぶクロマツは宮城県下でもほとんど見られなく

なり、現存する松並としては珍しく景観上からも貴重なもので、平成 19 年 1 月に市の登録文化財にも登録されています。

震災の際には、土手の松並みは名取川の堤防上にあつたため、大きな被害はありませんでしたが、根元付近まで多量の海水が押し寄せたため、今後も注意深く様子を見守る必要があります。



震災前の土手の松のようす



松の脇を流れる名取川の震災直後のようす



松の脇を流れる名取川河川敷のようす（現在）